

ウイルスに翻弄ほんろうされ、社会の行事も縮小、取りやめになり、侵略を許す格好に成っています。

四月は学校や社会が新しい年度を迎えますが、ウイルス問題が収束しゅうそくする気配は無く、米国や、西欧諸国から世界に蔓延まんえんし始めました。イタリアでは二八日現在で九千人の死者が出ています。これらを懸念けんねんして、オリンピックの開催も一年のび来年の七月二十三日に延期されます。ここのく変わる状況の変化を見守るしかありません。一日も早く収束しゅうそくに向かうことを祈念致しています。歴史的に見れば、昔、日本で疫病えきびょうが流行はやりった時には僧侶の祈禱きとうで収まったと、あります。偉い坊さんにお願いの一つの方法かも知れません。法力ほうりきを持ち合わせた坊主がいるか、いないかは存じません。

昔、仏教学者の椎尾辯匠しいおんきやう先生が提唱ていしょうされました**共生きやうせい「(ごころ)生き・身生き・事生き・物も生き・人みな生きる」共生の家**です。この思想は現在も通用します。これから日本を背負せおっていく人たちに人生訓として守ってほしいと思います。この思想が私は平和の原点であると思っています。

真宗の僧侶に平野圓玄へいげんという方がみえまして、その御方が次のように述べて見えます。「食は一時の飢えをしのぎ、財は一生の乏しきを補い、仏法は永遠の迷いを救う」。「金より物より、もつと高価なもの、それは愛情である。捧げても減らない愛、与えても、尽きない情」。「徳を以って人に勝つ者は栄、力を以って人に勝つ者は滅ぶ」。誠に金言なり。人は心次第で善にも進むし、悪にも染まります。自己中心に成りやすいけれども、「悪事を見のがさず」、「悪事に耳をかさず」、「悪言を履かず」、「二枚舌を使わず」、「忘己利他」に勤めれば、人間としての道を外れることなく、自ずと仏心に叶うなりと、私は思います。

鈴木正三しよくちゆうざん（正三道人）が「念佛を称える場合には、念仏に勢いを入れて南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と称えよ」と、教えました。私も同感で、蚊の鳴くような声で称えるのでは無く、大きな声で称える事を推奨します。凡人は小さな声は雑念入りやすく、大きな声は雑念が入りにくいものです。邪念無き念仏の声で、己の身が包まれる様にと考えて見えたと思います。それにも姿勢が大事です。関口真大教授は「母の胎内に宿る時、一番大切な場所臍、生まれ出て、一番大切な場所、それは呼吸を受け持つ鼻です。この二箇所鼻と臍を垂直に結ぶ姿勢をとれば良いと指導されました。この姿勢で座禅を組めば短氣も治るそうです。お試しあれ。

仙厓義梵せんがいぎぼんという方が祝辞に「死ね死ねと言うまで生きよ 花嫁子」と読みました。現在の長寿を先取りしています。「生きるるを死ぬる始めと我は知る、始め有る身の終らましやは」と、始めあれば終わりが来るが今は分らない、とでも言ったのでしょうか。佐藤愛子女史は橋田寿賀子女史との会談で地獄はあるとし、地獄に往かない為には「恨み、つらみや強い心残り、物質的な欲望、強い執着や情念をもたず、感謝の気持ちを持つこと」と、と解釈して見えます。勿論、不殺生、不偷盗、不邪淫等、道徳を踏まえた上での話でしょう。

令和二年四月一日

善入院油掛地藏尊